

## 声楽家への軌跡-『師』との創造体験Ⅱ

～共演の場での教え・小澤征爾先生～

豊田 喜代美

多くの優れた指揮者・演奏家との共演体験が私を演奏家として育ててくれたと思っています。その恵みに心から感謝しています。小澤先生との最初の共演で演奏家としての基本姿勢を叩きこまれ、それまでの自分が壊され演奏家になるのを実感しました。今日まで私が演奏活動を行えているのは、デビュー時の数々の小澤先生との共演体験からの学びが通奏低音のように、演奏する私を支え続けているからだと思います。

小澤先生との初共演は、29、30才頃、ベートーヴェン作曲《ミサ・ソレニムス》L.v.Beethoven “Missa solemnis”（新日本フィルハーモニー/東京カテドラル教会）でした。オーケストラ練習に入った時に「何で、そんなにつまんなように歌っているの？」と、本当に不思議そうに私の目の奥をのぞき込んでつぶやくようにおっしゃいました。私は、つまらないとは全く思っていないので、「何でこんなことをおっしゃるのだろう」と思い、理由を考え、私はきっちりと正確に歌うことしか意識していないことに気づきました。小澤先生は、豊田は譜面は正確に歌うが感性を十分に作動させていないことを見抜かれたのだと思いました。その後の練習時には、顔を覗き込んで目を凝視して指揮をなさりながら爆発的なエネルギーを注ぎ込んでくださるのを感じました。指揮者『小澤征爾』の目は挑戦し挑むように強く鋭く、魂の中まで入ってくるように感じました。はっきり言って恐ろしいほどの迫力で、逃げるか戦うかを迫られていると感じました。私の負けん気が出てきて、全身全霊で振り絞った魂からのビームで先生の迫力を押し返そうしました。ついに私の中の固い部分（ちっぽけな自尊心かもしれません）が砕かれて魂の中の熱いマグマが吹きあがるのを実感しました。その感覚が、その後の演奏の基点レベルになったと思います。

同じ頃、小澤先生は放送で「楽譜に全てがある。勉強あるのみ。その上で自分がどう演奏したいかだ」と仰っておられました。楽譜を正確に把握し、譜面にこめられた暗黙の意味を捉え、とことん練習を重ねることによって、作品と自分の感性が合致して、本番では思ってもみないような表現が創出されることを、この演奏会で初めて体験しました。この演奏会后、「本番が一番良かったね。」とのお言葉を頂きました。小澤先生との最初の演奏作品であるベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》の共演の場で、演奏家としての基本を教えて下さったと思っています。

後日、小澤先生がサイトウ・キネン・オーケストラで若いヴァイオリン奏者を指導なさるテレビ映像を見ました。小澤先生は、その奏者の顔の間近で目を凝視しながら指揮をなさっていらっしゃいました。その若い奏者は必死の演奏で応えていたのを見て、懐かしく思いました。

しばらくして小澤先生とシェーンベルク作曲モノオペラ《期待》Arnold Schönberg の”Erwartung”を新日本フィルハーモニーの定期演奏会他で演奏しました。この曲は12音で作曲された、いわゆる難曲と言われています。自分が指揮できるまでに楽譜を読みこまないと、とても演奏できないと思い、必死に自主練習を行い、気づいたら暗譜できていました。どれだけ歌えるようになっているのか不安でしたが、最初の小澤先生との合わせで先生の指揮についていくと、乗り物に乗ったようにスムーズに歌が進んでいく快さがあって本番を迎えるのが楽しみになりました。この時の演奏体験が、後の柳慧作曲モノオペラ《火の遺言》の企画制作演奏につながりました。

小澤先生の指揮でベルク作曲のオペラ《ヴォツェック》マリー Alban Berg “Wozzeck”を歌いました。人間の憐れが壮絶に描かれているこのオペラの自主練習を重ね、役にのめりこんでくうちに精神的にかなり憔悴していたのだと思います。口数も極端に減っていたようで、普段は一切干渉しない母から「どうかしたの？」と声をかけられ、「自分はどうかしている」ことに気づいて我に返り、資料を読んで作品全体への理解を深めようと努めるうちに頭の中が整理されてきて自主練習に向かうことができました。この時、役作りは主観と客観のバランスが必要であることを私なりに学びました。

このオペラの内容は『19世紀初頭・ドイツの小さな軍隊駐屯場が舞台。主人公は貧乏な元理髪師のヴォツェックで内縁の妻マリー（豊田の役）と幼い息子と暮らしている。ヴォツェックはお金を得るために人体実験の被験者の仕事もしており、その実験に加えて過酷な生活苦により精神状態が危うくなっていく。そうした中でマリーは鼓手長と浮気をしてしまう。マリーは自責の念にかられ、罪を悔やんで聖書にすがり、夫以外の男と姦通した女を神が赦し、二度と過ちを犯さないようにと諭す章を繰り返し読む。』この場面は、マリーがここ数日会いに来ないヴォツェックを想い、言い知れぬ不安に駆られ、自責の念を抱きながら聖書を読むもので、私にとってはマリーの魂の慟哭と神の救いへの祈りを自らの心と身体で体験するものになりました。この時の間奏曲のオーケストラ演奏はそれこそもの凄い名演で、社会的にも高い評価を得ましたが、私自身も非常に感動しました。人間の憐れさと救いへの強い希望を、これほどまでにオーケストラが歌って表現した演奏を、後にも先にも私は体験したことはありません。

このオペラの内容の続きは次のとおりです。『ヴォツェックはマリーを連れ出し、東の空に不気味な赤い月を見て「あれは血の色だ」とマリーに呟き、ナイフでマリーの心臓を一突きし、マリーは絶命した。ヴォツェックはナイフを捨てようとして池の奥へ奥へと入っていき沈んでいった。子供たちが遊んでいるところに子供が駆けてきて「マリーおばさんが死んでる！」と言い、子供たちはマリーの子供に「お母さんが死んだって！」と言い、池の方へ走り出す。マリーの子供は、少しの間1人で遊んでいたが皆の後を追って池の方へ走っていく。幕。』なんとも壮絶な内容であり、ベルクの音楽はその内容を十二分に描き出したものと思いました。鼓手長役の歌手経由で、小澤先生が「豊田さんは表現力が凄い」とおっしゃったことを聞き、このオペラの小澤先生との共演で私の表現力が育ったことが解り、嬉しく、自信になりました。

後に、ウィーンフィルハーモニーの定期演奏会時に、主席チェロ奏者の隣で学生奏者が顔を真っ赤にして必死に演奏しているのを見ました。『共演の場で師匠からの教えを受ける伝統』だと聞き、私は

正に同じく、共演の場で小澤先生の教えを受けてきたことを確信しました。

幼い時の音楽体験を重要視している小澤先生はサイトウ・キネン・オーケストラの活動で長野県の小学校などでご奉仕の演奏会を行っています。ベートーヴェン交響曲第九番で共演させて頂いた時には、場所が豪雪地帯で空が上に細く見えるような高い雪の壁を初めて見て驚きながらバスで移動し、ドレスの下に長靴を履いての演奏になりました。体育館の平土間に座って、同じ平土間で指揮する小澤先生の背中を見ながらオーケストラ演奏を間近で聴いていた最前列の子供たちは涙で顔をぐしゃぐしゃにして泣きながら聴いていました。小澤先生の想いは伝わっていると思いました。幼い時の音楽体験の影響の大きさを、私は小澤先生とサイトウ・キネン・オーケストラとの共演から学びました。

小澤先生との最初の共演から学んだ、自分の魂と作品をつないでの演奏（楽譜を徹底的に読み、自分の感情を歌詞に寄せ、曲の中に暗黙に込められている作曲家・作詞家の世界観を自分の魂とつないで表現する演奏）がインターナショナルであり、国籍・人種・宗教の差異を問題にする次元を超えて至高の共感に導くことを実感する演奏会を体験する恵みが与えられました。

オランダでの北オランダ交響楽団定期演奏会モーツァルト作曲《モテット KV.165》Mozart “Exsultate, Jubilate” 3 回の演奏会全てで全聴衆のスタンディングオーベーションを頂いた素晴らしい演奏体験でした。小澤先生はじめ諸先生方のご指導に深く感謝しました。

またブーレーズ作曲《プリ・スロン・プリ》Pierre Boulez “Pli selon pli”（若杉弘指揮、東京都交響楽団）日本初演時、見慣れた楽譜とは異なる譜面に加えてオケスコアで演奏するという難曲を自分なりの表現にまで持って行くことができたのも、徹底して楽譜を読むこと、ひたすら練習を重ねることで必ずどんな曲も演奏できることを信じさせてくださった小澤先生のおかげです。

小澤先生の多くの優れた演奏家との交友関係は知られています。世界的チェリストのロストロポーヴィッチもその一人で、OZAWA=ウィーンフィルハーモニー定期演奏会のロストロポーヴィッチのリヒャルト・シュトラウス作曲《ドン・キホーテ》Richard Strauss “Don Quixote” を夫と聴きました。

NHK のロストロポーヴィッチのドキュメント番組で、ヨハネ・パウロ二世からの「あなたは自分のしていることが天国への階段を上っているかどうかを思ってください。」の言葉に「私は天国への階段を上っていきたい。時々、一段二段と降りてしまう。」と言っていました。私と夫は、ロストポーヴィッチ夫妻の生き様とヨハネ・パウロ二世とのやり取りに感動したことを演奏会後にロストロポーヴィッチに告げました。その時反射的に、とても強い力で夫と私を一人ひとり抱きしめてくれました。驚きました。私は深い情を感じて思いがけず涙が出ました。番組は、世界的なソプラノの妻・故ヴィシネフスカヤが亡命する夫に従って祖国を離れ最期まで夫を支えて共に生きた芸術家ご夫婦の歴史でした。私はロストロポーヴィッチの強く熱い抱擁に、ご夫妻の情愛を感じました。私たち夫婦にとって忘れられない素晴らしい思い出です。

小澤先生の活動を拝見すると、若い人への音楽教育への情熱、音楽家でなく音楽に関係ないところにいる人とも音楽を通して共感し合いたいという願いを持っているのが、私なりに解ります。師と仰ぐ小澤征爾先生の『音楽演奏の共感』を私なりに演奏と教育とで、微力ながら感謝と共に実践していきたいと思っております。

私は期せずして、音楽家を目指していない学生さんたちに『声楽・身体運動科学』を通して歌唱演奏を指導する教育の場が与えられました。学生さんにお伝えする内容は、私の音楽演奏の場での創造体験と知識科学が基盤になっており、身体運動科学者の工藤和俊先生と共に担当しています。学生さんが『自分で自分を育てる』という意識が持てる授業でありたいと考えています。

次号では、上記の声楽と知識・身体運動科学を用いた創造性支援の授業内容と、声楽家の豊田を知識科学博士に導いてくださった福岡のホスピス患者さんの歌の力についてお伝えさせていただければ、と思います。



左から実相寺 昭雄(演出),松原 千代繁(当時新日フィル事務局長),小澤 征爾先生,豊田 喜代美(マリー),  
多田羅 迪夫(ヴォツェック),秋葉 京子(マルグレート)